

表紙の挿し絵について

この挿し絵は方豪氏の一連の著作の中ではしばしば登場する『無極天主正教眞傳實錄』の首葉に掲げられているものである。¹⁾

左に明代の衣装をまとった儒士（中国人）が拱手の禮で「道」を問うており、その後ろには円形の塔が見える。右には天主教ドミニコ会の服裝をした宣教師が、手に「經典」を持ち、その問い合わせに答えている。背景にはヨーロッパの「教会」が見えている。まさに「東西」の接触、交流を象徴するものであるように思われる。

本書はスペインのマドリッド国立図書館（Biblioteca Nacional de Madrid）に所蔵され、全64葉、毎半葉十行、毎行二十字。その首葉の右欄外に『新刻僧師啞呴²⁾羨撰無極天主正教眞傳實祿』とあり、書名は『無極天主正教眞傳實錄』、作者は「啞呴 羨」すなわちスペインドミニコ会士Juan Coboであることがわかる。また左欄外には、「此書之作非敢專製乃旨命頒下和尚王國王始民希蠟召良工刊著此版係西士乙千伍百九十三年仲春立」とあり、本書が「和尚王」、つまり主教の命を受けて「民希蠟」＝マニラで「西士」＝耶穌降生1593年に出版されたことが述べられている。

本書は欧米人による中国語での西洋科学を伝えたものとしては最も早いものであり、内容は以下の通りである。

- 章之首 辯正教正傳
- 章之二 論真有一位無極為萬物之始也
- 章之三 謂無極之事情
- 章之四 論地理之事情
- 章之五 論世界萬物之事實
- 章之六 論下地草木等之物類
- 章之七 論下地禽獸之事情
- 章之八 論世間禽獸之知所飲食
- 章之九 論世間禽獸之知所用藥

前三章は宗教的な内容であるが、残りの六章は、地理学、生物学、医学、天文学、宇宙論等に関するものであり、たとえば地球を「六區」、つまり「北極」側と「南極」側をそれぞれ「温區」「熱區」「寒區」に分けたことなどはリッチに先行しており、極めて注目すべき内容となっている。

本書に関する研究は方豪氏のもの以外にはまだ本格的なものは余りないように見受けられる。Cobo以前および以降の影響関係、たとえばリッチや等との関係は非常に興味深いところであり、今後の研究課題の一つである。

また、Coboには方豪氏の研究によれば、他に以下のような著作がある。

1. Itinerario de China. 「中国旅行指南」
2. Vocabulario chino. 「中国語辞典」
3. Arte de la lengua china. 1602. 「中国言法」
4. Muchas y graves sentencias de filosofos,incluso gentiles, como Seneca, y otros, tomadas de sus libros y trasladadas en caracteres chinos. 「哲学者著名語録中国語訳」
5. Beng sim po cam. 1592. 「明心寶鑑」のスペイン語訳。
6. Tratado de astronomia. 「天文学概論」
7. Catecismo de la Doctrina cristiana. 1593. いわゆる「ドチリナキリストン」の最初の中国語訳。日本でも天草において同時期(1591)にイエスズ会によるローマ字日本語訳が出来ている。

なお、本書は関西大学の平田渡氏が在外研究でマドリッドに滞在中に特に依頼してマイクロフィルムに収めることができた。ここに記して感謝の意を表しておきたい。

注

- 1) 方豪氏による本書の研究には以下のようなものがある。
 - ・「流落於西葡的中國文獻」『學術季刊』一卷二期(1952.12) のち『方豪六十自定稿』(1967)に收録
 - ・「從中國典籍見明清間中西文化關係」『中國與西班牙文化論集』(1965, 中國文化學院西班牙研究所出版)および『方豪六十自定稿』(1967)に收録
 - ・「明萬歷間馬尼拉刊印之漢文書籍」『方豪六十自定稿』(1967)
 - ・呂宋明刻「無極天主正教真傳實錄」之研究、『天主教學術研究所學報』第 5 期、のち『方豪六十至六十四自選待定稿』(1974.4)に收録
 - ・『中西交通史』(1954.5)
 - ・『中國天主教史人物傳』第一冊(1967)
- 2) Cobo は萬歴 16 年(1588)にフィリピンのマニラに到着。中国人の間で布教活動を行った。その後、1592 年に使節団を率いて来日し、豊臣秀吉との謁見を図るが果たせず、帰途、台風に遭遇し、台湾に漂着、そこで没した。→比屋根安定『日本基督教史』殉教編を参照
- 3) 中国科学院自然科学史研究所の韓琦氏のご教示によれば、本書はマニラで影印本(『辯正教真傳實錄 Pien Cheng-chiao chen-chuan SHIH-LU』UST Press, Manila, 1986)が出ているようだが、筆者は未見。
(内田慶市)